

## 「動機付け」と「方向付け」で、自己有用感を高める

【キーワード】動機付け 方向付け 「問いチャート」 劇作りワークショップ いじめの四層構造

## 1 問題の所在

第38回教育再生実行会議（平成28年10月28日）の参考資料2によると、日本の子どもたちの自己肯定感は諸外国に比べ低い状況にある。さらに、平成30年度全国学力・学習状況調査報告書（平成30年9月香川県教育センター）によると、香川県は、児童質問紙で「自分にはよいところがある」と肯定的に答えた児童生徒の割合が全国で最も少ない県の一つとなっている。さらに、同調査によると、同じ設問について本校の肯定意見の割合はさらに極端に少ない状況にある（国84p、県82.1p、本校73.6p）。そこで、子どもたちの自己有用感を高めることが、本校の喫緊の課題であると教職員間で共通理解し、共通実践に取り組むこととした。

## 2 研究の目的

上記の課題解決を図るため、子どもをその気にさせるには、どのような教師の働きかけが有効かを明らかにする。

## 3 研究の方法

## 【柱1 自己有用感を高める授業づくり】

現職教育において、ふりかえり活動を問いつなげる教師の働きかけを「動機付け」と「方向付け」のいずれであるか、授業者の意図を明らかにした上で、授業を公開することを通して、それぞれの働きかけが、主体性の象徴である「問い」を育てることにどれほど有効であったかを検証する。

## 【柱2 自己有用感を高める劇作りWS】

リーダーが変われば組織も変わる。ファミリー人権集会の企画・運営、さらに問題提起のための「いじめ劇」を六年生に任せることで、六年生のリーダーとしての自覚を促す。またその際、プロの演出家や俳優を招聘し表現に磨きをかけることで、自分の表現への自信をもたせたい。

## 4 研究の内容

子どもの自己有用感を高めるためには、①成功体験、②力を試す舞台、③価値ある行動と価値付けが有効とされている。しかし、それらの活動に対して、子ども自身がその気になっていないと大

きな効果は期待できない。そこで、子どもをその気にさせる教師の「動機付け」と「方向付け」について、実践研究を進めることにした。

## ■ 自己有用感を高める授業づくり

学習問題までの授業の導入10分間に焦点を絞り、お互いに授業を公開し合った。

授業者は、公開授業までに、これまでの学習を想起するふりかえり活動を、いかに学習問題へとつなぐか、その働きかけの意図を説明した「実践の構想」を参観者に配布する。授業後、開発した「問いチャート（4観点3段階評価）」を活用し、自己評価と他者評価を照らし合わせ、互いの授業観を磨いてきた。

## ■ 自己有用感を高める劇作りWS

自分で決めたことが現実となっていく過程で、子どもたちは力試しのどきどき感と「成功した」という充実感を感じることができると考え、ファミリー人権集会の企画・運営、問題提起の劇を六年生に任せた。

まず、過去6年間の本校で起きたいじめの数の推移のグラフについて話し合い、「いじめをなくしたい」という動機付けを図った。さらに、校長先生からの依頼という形で、ファミリー人権集会の企画・運営を六年生に委ねた。「いじめの四層構造」の図と義務教育課作成のいじめ劇を使って「誰に働きかけるか」を話し合わせ（方向付け）、一番人数の多い傍観者へ働きかけることを決めた。

次に「いじめをなくすためにどんな取組が有効か」を話し合い、取組ごとにチームを編成した。例えば、案内ちらしチームは「ゲストとして誰を招待するか」を話し合い、中学校や高校の先輩にいじめについて意見をもらいたいと、ちらしを配りに行った。他にも「いじめゼロ会議チーム」、「会場設営チーム」、「いじめゼロ憲法制定チーム」が結成された。チームで話し合い、決めたことを実行していった。

同時に、プロの演出家や俳優の助言をもらい問題提起の劇作りも進めていった。

## 5 成果と課題

(略)